The 10th Meeting of Japan Society of Stuttering and Other Fluency Disorders

日本吃音・流暢性障害学会
第10回大会

プログラム・抄録集

豊かな想像力と多様性を拡げる社会

会期 2022年9月3日(土)・4日(日)

会場 国際医療福祉大学 大田原キャンパス
栃木県大田原市
Web開催

大会長 前新 直志 国際医療福祉大学言語聴覚学科

The 10th Meeting of
Japan Society of Stuttering and Other Fluency Disorders

日本吃音・流暢性障害学会
第10回大会

プログラム・抄録集

テーマ

豊かな想像力と多様性を拡げる社会

会期 2022年9月3日(土)・4日(日)

会場 国際医療福祉大学 大田原キャンパス（WEB開催）
栃木県大田原市

大会長 前新 直志 国際医療福祉大学言語聴覚学科

日本吃音・流暢性障害学会第10回大会事務局

国際医療福祉大学言語聴覚学科
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1
E-mail : jssfdmeeting10@gmail.com

ご　挨　拶

日本吃音・流暢性障害学会 第10回大会
大会長　**前新 直志**
（国際医療福祉大学 言語聴覚学科）

2022年9月3日（土）・4日（日）、栃木県大田原市の国際医療福祉大学において、日本吃音・流暢性障害学会第10回大会を開催させて頂くことになり、大変光栄に存じます。

最初の緊急事態宣言から3年目、当初は実感のなかった「新しい生活様式」も現在は当たり前となりました。1960年代に通信システムの技術が進み、Macintosh や Windows の登場は日常のコミュニケーションツールを完全に変えました。これもある意味で新しい生活様式になった出来事とも言えます。非接触型のコミュニケーションが常識となり、本学会も第8回（2020）、第9回（2021）はオンライン開催となりました。すでに構築されていた利便性の高い新しい生活様式が、感染症による新しい生活様式を克服した、と言えるのかもしれません。しかし、話しことばやコミュニケーションを扱う分野としては、やはり対面でしか得られないことがあることも確かです。画面を通して表情を読み取れるようになりましたが、実際に向き合って話したり、議論や意見交換で、その方向性を大きく左右する微妙な間や相槌のタイミング等は、オンラインでは難しい場合があります。人は対面によるコミュニケーションにおいて、社会的動物（アリストテレス）であると同時に考える葦（パスカル）でもあります。その営みを通して豊な想像力が生まれ、様々な感性を互いに共有し合えるのだと思います。その観点から、今大会は、できる限り「対面」を重要視しておりますが、完全オンライン開催の可能性を残しつつ、対面とオンライン形式の併用を前提に準備して参りました。

特別講演としてノンフィクションライターの近藤雄生氏をお迎えできることを大変嬉しく思います。自身の吃音と向き合いつつも、様々世界に目を向けた経験に基づき、多種多様な価値観についてお聞きできるのではないかと思います。その他に、幼児吃音臨床ガイドラインの策定に関する講演、また幼児・学童期吃音の臨床および臨床セミナー「吃音臨床の手引き」を活用した実践演習を設けました。そして今大会のテーマと関連する、話しことばにおける多様な流暢性の問題を踏まえ、他の障害と併存する吃音への対応について考えたいと思います。当事者企画としては、「吃音と共に生きる」上での大切な事や、またその過程で必要な「心理的支援」は何か、「吃音交流会」[注)]や「マイメッセージ」を通じて、多様性が拡がる社会を皆さんと一緒に考えることができればと思っています。「栃木県通級指導教室企画みんな集まれ！スタンプラリー」[注)]では、吃音のある子ども達同士での楽しいレクレーションを行いますが、その間に行う保護者同士の情報交換会では吃音ドクターでお馴染みの菊池良和医師（九州大学病院）にも参加して頂く予定です。日々の生活におけるアドバイスを受ける機会になれば幸いです。一般演題では全27演題（口頭発表14、ポスター13）がエントリーされました。開催方法の不確定要素がある中でエントリーして下さった方々、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

今大会の全ての内容が、多くの個人にとって何か有益な情報となることを切に願うと共に、感染対策が当たり前となった昨今、皆様の心身の健康とさらなるご活躍・ご発展を心よりご祈念いたします。

注）：開催形態がオンラインとなった場合は、中止となります。

第10回大会にあたって

日本吃音・流暢性障害学会
理事長　長澤 泰子
（NPO法人こどもの発達療育研究所）

日本吃音・流暢性障害学会第10回大会が、9月3日（土）・9月4日（日）の2日間にわたり、国際医療福祉大学の前新直志大会長のもとで開催されることを、心からお喜び申し上げます。

昨年および一昨年は、新型コロナウィルスの影響で完全にオンラインによる大会になってしまいました。第10回大会は、対面とオンラインの両方で開催するとのことですから、何割かの会員の皆様が、3年ぶりに対面でことばを交わすことができることになります。出来るだけ多くの方々にお目にかかれるように願っています。

第10回大会のテーマは「豊かな想像力と多様性を拡げる社会」です。プログラムは、かなり通常の形に戻り、口頭発表14題、ポスター発表13題、大会企画のシンポジウム、学会企画の臨床講座、ユニークな栃木県通級指導教室企画の児童・保護者による情報交換交流会などが行われます。教育講演は、森浩一先生の「幼児吃音臨床ガイドライン策定の経緯とねらい」、大会長講演は、前新直志先生の「話しことばにおける流暢性の問題と共生社会に向かって」というそれぞれのタイトルで講演をしてくださいます。詳しくは大会のプログラムをご覧ください。

特別講演は、市民公開講座として、近藤雄生先生が「吃音の先にあった多様な世界」というタイトルで講演をしてくださいます。会員の多くの方はご存じだと思いますが、近藤先生は2019年に「吃音　伝えられないもどかしさ」を出版なさっています。その本には、本学会の第7回大会で特別講演をしてくださった重松清氏が「よくぞここまで吃音と向き合ってくれました。吃音を持つ者として、最敬礼。」という帯文を添えておられます。近藤先生が特別講演においで下さるということを前新大会長からお聞きして、すぐに我が家の書棚から先生のご著書を張り出しました。付箋が沢山付いていました。が、結局再度読み直して、一度目以上の感銘を受けました。臨床にあたっての大切なことが本当に沢山記載されていました。吃音の先の多様な世界を伺うことが、本当に楽しみです。

自分の想いを述べてしまいました。会員の方それぞれが、それぞれの想いをお持ちのことと存じます。吃音という紀元前からの人類の大問題に取り組んでいる私たちには、なすべきことや出来ることがかなり多くあると思います。お互いに切磋琢磨しながら、それらを明確にしていくことが、本学会の目的のような気がします。

コロナはいったん下火になったようですが、このまま収まって多くの会員が対面で参加できることを願っています。

参加者の皆様へ

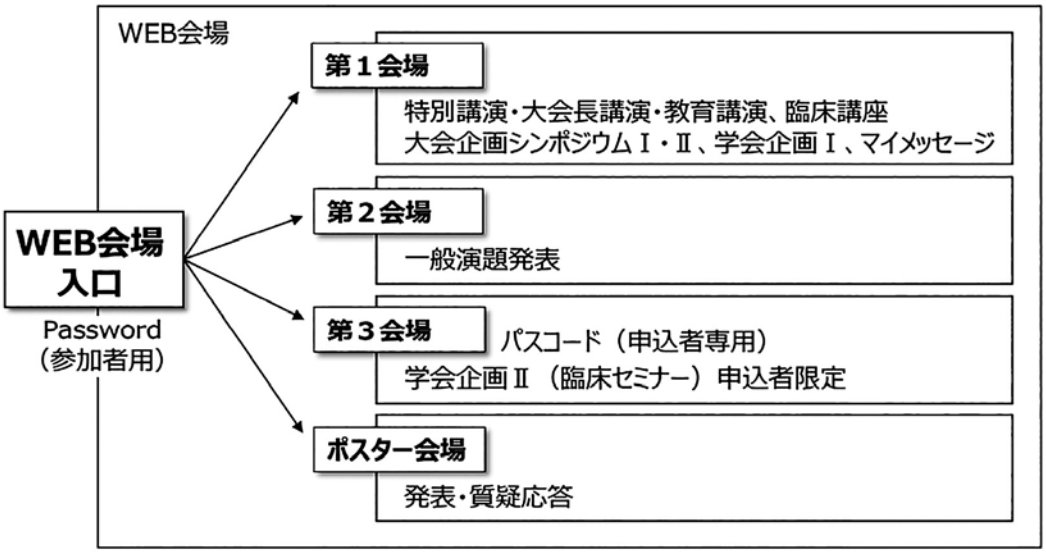
本大会はオンライン（WEB ライブ配信）で開催いたします。吃音・流暢性障害に関する有益な研究または医療･福祉･教育等における臨床、指導、支援およびセルフヘルプグループ活動など様々な背景をもつ方々が情報交換を行い、当該領域の発展を目的としています。

1. WEB 会場の構成

大会企画プログラムおよび学会企画は、オンライン配信にて行います。

オンラインツール：ZOOM（Zoom Video Communications, Inc）

WEB 会場は以下の通りです。



※各会場には大会事務局の管理者スタッフが常駐します。

■第1会場～第3会場：ライブ配信で展開します。

■ポスター会場

発表者の抄録集（PDF）と発表スライド（PDF）を掲載します。大会期間中にポスタースライドを閲覧して頂きます。演題ごとに質問と回答欄を設けますので、ルールを守ってご参加くださるようお願い申し上げます。

2. 参加方法

1）WEB 会場への入場について

WEB 会場の入口は、大会ホームページ（https://meeting10-jssfd.secand.net）にあります。大会事務局より送付される参加者用パスワード（ユーザー名とパスワード）をご用意ください（参加登録いただいた方には、8月31日（水）正午にメールにて送付いたします。31日中にメールが届いていない場合には、大会事務局 jssfdmeeting10@gmail.com までご連絡ください）。

※パスワードは受け取られた個人のみで使用可能です。他人に教えることや公開は厳禁となりますので、ご注意ください。

［WEB 会場ページへの移動イメージ］

2）入場手順

①パスワードにて「WEB 会場入口」よりご入場ください。

②WEB 会場入場後、参加する会場ボタンをクリックしてください。

③第1会場、第2会場への入場は、自由に行えます。会場を移動する場合には、現在の会場から一度退出し、改めて参加したい会場ボタンをクリックしてください。

3. ZOOM への接続について

以下のルールを厳守してくださるようお願い申し上げます。

1）事前に Zoom アプリを最新バージョンに更新を済ませておいてください。ZOOM の更新方法は使用する OS（Windows や Macintosh 等）によって異なります。
WEB 会場に入る前に、各自で最新バージョンに更新を済ませておいてください。

2）ZOOM のマイクとカメラは必ずオフにしてください（大会事務局で初期設定済み）。
事前に ZOOM を以下の設定にしておくことをお勧めいたします。

■ビデオとオーディオ設定にて、
「ビデオに参加者の名前を常に表示します」にチェックを入れてください。
「ミーティングの参加時にビデオを停止（オフ）」にチェックを入れてください。
「ミーティングの参加時にマイクをミュートに設定」にチェックを入れてください。

※ Windows、Mac 等の OS の違いで若干文言が異なります。

3）参加登録完了メールに記載された「受付番号」をご用意ください。

4）ZOOM に入室中は、表示する名前を以下のように変更してください。

- 会　員「受付番号　氏名　会員番号」（例；123　国際太郎　008）
- 非会員「受付番号　氏名」（例；98　国際花子）

大会事務局にて本人確認を行っております。

受付番号氏名が不明な方は参加をお断りする可能性があります。

5) 各会場ライブ配信にて「音声：オフ」「画面：オフ」「共有：発表者のみ」を厳守してくださるようお願い申し上げます。

6) 質疑応答やコメントについては、司会の指示で行います。質疑応答の際は、必ず所属とお名前をお願いします。なお、チャットでのご質問やコメントは対応できない場合があることをご承知おきください。

7) 第3会場（学会企画Ⅱ）参加者：「学会企画Ⅱ（定員制）参加者へ」をご参照ください。

司会者（座長）の方へ

1. 開始時刻15分前までに、担当会場に入室し、表示名を以下のように変更しておいてくださるようお願いいたします。スタッフが確認させて頂きます。

   司会者の表示名：「司会　氏名」（例　司会　国際太郎）

   司会の終了後は、表示を「受付番号　氏名　会員番号」に変更ください。
2. 開始時刻前にアナウンスが流れますので、その後に司会進行をお願いします。
3. 口頭発表の1演題の発表時間は13分（目安：発表10分、質疑応答3分）です。
4. 質疑応答の際（座長・司会者を含む）は、所属と氏名を確認してください。
   原則、オンライン上での質疑応答といたします。チャットでの質問やコメントも受け付けますが、質疑応答中の時間配分などを踏まえて、適宜ご対応をお願いいたします（参加者には、チャットでの質問に対応できない場合があることをお知らせしておきます）。

発表者（登壇者）の方へ

■講演・各プログラム登壇者

1. 開始時刻15分前までに、担当会場（ZOOM）に入室し、表示名を変更しておいてくださるようお願いいたします（「ZOOMへの接続について」参照）。スタッフが確認させて頂きます。
2. 開始時刻前にアナウンスが流れた後、司会進行に従ってご講演ください。
   なお、各会場管理者（大会事務局スタッフ）のほうで、共有できるようにしておきます。
3. 講演後、司会者の指示で終了となります。

■一般演題・口頭発表者

1. 筆頭発表者は開始時刻20分前に、発表会場（ZOOM）に入室し、表示名を変更しておいてください（「ZOOMへの接続について」参照）。スライド共有と音声チェックの確認を行います。
2. 1演題13分（発表10分・質疑応答3分）です。発表は録画させて頂きます。
3. 動画・音声等を使用される場合は、事前に「動画」「音声」としてスライドに挿入してください。元データから「リンク」させることはトラブルの原因になる場合があります。
4. 開始時刻前にアナウンスが流れた後、1番目の人は司会進行に従ってご発表ください。
   2番目以降の発表者は、当該群の参加者として待機し、司会進行に従ってご発表ください。
   なお、各会場管理者（大会事務局スタッフ）のほうで、共有をできるようにしておきます。

5. 発表者はご自身のPCにて、ZOOM「共有」操作をお願いします。
質疑応答は司会者の指示に従ってご対応ください。チャットでの質問も受け付けますが、司会者の判断で対応できない場合があります。予めご了承ください。

■ポスター発表

1. ポスター発表は、WEB上に抄録集（PDF）とスライド（PDF）を掲示し、参加者が自由に閲覧、質疑応答できる環境で行います。
抄録の提出、発表ポスターの公開、質疑応答をご対応頂くことで発表とみなされます。
2. 質疑応答のルール
1）各ポスター閲覧サイトにコメント欄を設けます。発表者は自身のポスターに対するコメント欄をチェックし、質疑・コメントへの応答を行ってください。
2）文字上でのやりとりとなります。お互いに誤解が生じないような文章（コメント・応答）にご配慮ください。また、個人情報の取り扱いについては、お互いに十分に注意してください。

学会企画Ⅱ（定員制）参加者へ

1. 本企画は定員制（申込者限定）で開催いたします。
2. 参加資格：事前に登録した方のみ。
参加者にはWEB会場入室パスワードとは別に、学会企画Ⅱ申込者専用パスコードを事前にメールにて送付いたします。
3. 参加者は開始10分前までに第3会場（ZOOM）に入室し、表示名を変更しておいてください（「ZOOMへの接続について」参照）。スタッフが確認させて頂きます。
4. ファシリテーターの指示により展開していきます。

総会議案書の質疑・意見聴取

大会2日目（9月4日）の12：50～13：30に第1会場にて「総会議案書の質疑・意見聴取」を行います。会員の方は当該時間に第1会場に入室してくださるようお願い申し上げます。

拡大理事会

日　　時：9月3日（土）17：30～19：30
実施方法：Zoomによるオンライン会議（第1会場）

日　程　表

1日目　2022年9月3日土

	第1会場 Zoom	第2会場 Zoom	第3会場 Zoom	ポスター会場 オンライン
8:30	8:30～ Web会場　開場			
9:00	9:00～ 開会挨拶 9:10～10:10 **教育講演** **幼児吃音臨床ガイドライン策定の経緯とねらい** 講師：森　浩一 司会：村瀬　忍	9:50～ Web会場 開場		9:00～17:00 ポスター閲覧・質疑応答
10:00	10:20～11:50 **学会企画Ⅰ** **幼児・学童期吃音の臨床** **－理解授業の実際とその意義－** 企画／司会：原　由紀 発表者：髙山 祐二郎 立花　潤 餅田 亜希子 指定討論：堅田 利明	10:20～11:00 **口頭発表 Ⅰ** **O-01～O-03** 座長：黒澤 大樹		
11:00				
12:00	12:00～13:00 **マイメッセージ** 企画／司会：新発田 健太郎 中村　響			
13:00		13:20～14:20 **口頭発表 Ⅱ** **O-04～O-07** 座長：塩見 将志		
14:00			14:20～ Web会場 開場	
15:00	14:50～16:10 **大会企画シンポジウムⅡ** **吃音・流暢性障害がある方への心理社会的支援** 企画／司会：横井 秀明 発表者：松原　充 北條 具仁 飯村 大智		15:00～17:00 **学会企画Ⅱ** **臨床セミナー「吃音臨床の手引き」を活用した実践演習** ファシリテーター： 堅田 利明 （申込者限定）	
16:00				
17:00				

2日目　2022年9月4日(日)

	第1会場 Zoom	第2会場 Zoom	第3会場 Zoom	第4会場 Zoom	ポスター会場 オンライン
8:30	8:30～ Web会場　開場				
9:00	9:00～10:00 **大会長講演** **話しことばにおける流暢性の問題および共生社会に向かって** 講師：前新 直志 司会：長澤 泰子				9:00～17:00 **ポスター閲覧・質疑応答**
10:00	10:10～11:40 **臨床講座** **他の障害と併存する吃音・流暢性障害への対応** 企画 / 司会：川合 紀宗 発表者：石上 志保 澤口 陽彦 宮本 昌子		10:00～11:20 **栃木言友会企画** **吃音交流会** 企画： 新発田 健太郎 中村　響 コロナ感染拡大により中止		
11:00		11:30～ Web会場 開場			
12:00		12:00～12:40 **口頭発表 Ⅲ** **O-08～O-10** 座長：中村 勝則			
13:00	12:50～13:30 **総会議案書の質疑・意見聴取**				
14:00	13:40～15:00 **大会企画シンポジウム Ⅰ** **吃音と共に生きる** 企画 / 司会：斉藤 圭祐 発表者：中村 泰介 辻　絵里 新発田 健太郎	14:00～15:00 **口頭発表 Ⅳ** **O-11～O-14** 座長：安　啓一		13:50～15:00 **栃木県通級指導教室企画** **みんな集まれ! スタンプラリー** **保護者情報交換会** 企画：五月女 美里 山本 敏江 石川 敏達 コロナ感染拡大により中止	
15:00	15:30～16:40 **特別講演・市民公開講座** **吃音の先にあった多様な世界** 講師：近藤 雄生 司会：前新 直志				
16:00					
17:00	16:50～ **閉 会 式**				

プログラム

特別講演・市民公開講座　9月4日　15：30～16：40　第1会場

司会：前新 直志（国際医療福祉大学）

SL　吃音の先にあった多様な世界

近藤 雄生（こんどう ゆうき）
ノンフィクションライター

大会長講演　9月4日　9：00～10：00　第1会場

司会：長澤 泰子（日本吃音・流暢性障害学会 理事長）

PL　話しことばにおける流暢性の問題および共生社会に向かって

前新 直志（まえあら なおし）
国際医療福祉大学

教育講演　9月3日　9：10～10：10　第1会場

司会：村瀬 忍（岐阜大学）

EL　幼児吃音臨床ガイドライン策定の経緯とねらい

森 浩一（もり こういち）
国立障害者リハビリテーションセンター

臨床講座　9月4日　10：10～11：40　第1会場

司会：川合 紀宗（広島大学学術院（大学院人間社会科学研究科））

［他の障害と併存する吃音・流暢性障害への対応］

C-1　知的障害併存例の実態と対応

石上 志保（いしがみ しほ）
東京逓信病院 小児科

C-2　発達障害併存例への対応　～言語通級指導教室での「自立活動」の実践から～

澤口 陽彦（さわぐち はるひこ）
福山市立霞小学校

C-3　早口言語症への対応：語用論的アプローチの重要性

宮本 昌子（みやもと しょうこ）
筑波大学人間系

大会企画シンポジウムⅠ　9月4日　13：40～15：00　第1会場

司会：斉藤　圭祐（吃音当事者、全国言友会連絡協議会）

［吃音と共に生きる］

SⅠ-1　吃音のある子供の親として

話題提供者1

中村　泰介（なかむら　たいすけ）

吃音のある子供の家族

SⅠ-2　過去の吃音体験の蓄積が、現在の私を支えてくれる

話題提供者2

辻　絵里（つじ　えり）

吃音当事者

SⅠ-3　吃音と社会のありかた

話題提供者3

新発田　健太郎（しばた　けんたろう）

吃音当事者、言語聴覚士、国際医療福祉大学塩谷病院

大会企画シンポジウムⅡ　9月3日　14：50～16：10　第1会場

司会：横井　秀明（特定非営利活動法人　つばさ吃音相談室）

［吃音・流暢性障害がある方への心理社会的支援］

SⅡ-1　ピアサポートによる青年期の支援

話題提供者1

松原　充（まつばら　みつる）

うぃーすた関西

SⅡ-2　専門職による青年期の支援

話題提供者2

北條　具仁（ほうじょう　ともひと）

国立障害者リハビリテーションセンター病院

SⅡ-3　吃音のある青年の就労支援

話題提供者3

飯村　大智（いいむら　だいち）

川崎医療福祉大学

学会企画Ⅰ　9月3日　10：20～11：50　第1会場

司会：原　由紀（北里大学）

SPⅠ　幼児・学童期吃音の臨床
―理解授業の実際とその意義

企 画 者：原　由紀（はら　ゆき）
北里大学

登 壇 者：髙山　祐二郎（長野県小諸養護学校）
立花　潤（長野市立青木島小学校）
餅田　亜希子（東御市民病院）

指定討論：堅田　利明（関西外国語大学短期大学部）

学会企画Ⅱ　9月3日　15：00～17：00　第3会場

司会：堅田　利明（関西外国語大学短期大学部）

SPⅡ　臨床セミナー
「吃音臨床の手引き」を活用した実践演習

企画／統括ファシリテーター：堅田　利明（かただ　としあき）
関西外国語大学短期大学部

グループファシリテーター：原　由紀（北里大学）
羽佐田　竜二（NPO 法人 つばさ吃音相談室）
田宮　久史（久美愛厚生病院）
坂田　善政（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
金子　多恵子（長野医療衛生専門学校）
餅田　亜希子（長野県東御市民病院）
西尾　幸代（福井県立福井東特別支援学校）

栃木県通級指導教室企画
みんな集まれ! スタンプラリー　9月4日　13：50～15：00　［ 中止 ］　第4会場

司会：五月女 美里（大田原市立大田原小学校）

吃音のある児童・保護者による情報交換・交流会
みんなあつまれ チャレンジ スタンプラリー

企画者：五月女 美里（そうとめ　みさと）、山本 敏江、石川 敏達
大田原市立大田原小学校

ゲスト：菊池 良和
九州学大学病院

吃音当事者企画 吃音交流会　9月4日　10：00～11：20　［ 中止 ］　第3会場

司会：新発田 健太郎（栃木言友会）

小グループに分かれての交流会

企画者：新発田 健太郎（しばた けんたろう）、中村 響
栃木言友会

吃音当事者企画 マイメッセージ　9月3日　12：00～13：00　第1会場

司会：新発田 健太郎（栃木言友会）

当事者が自身の体験や思いを自由に発表する

企画者：新発田 健太郎（しばた けんたろう）、中村 響
栃木言友会

口頭発表　プログラム

口頭発表Ⅰ　9月3日（土）　10：20～11：00　第2会場

座長：黒澤　大樹（太田西ノ内病院）

O-01　吃音症における社交不安とコーピング特性の関係

○富里　周太（とみさと　しゅうた）[1)]、矢田　康人[2)]、甲能　武幸[1)]、和佐野　浩一郎[3)]

1）慶應義塾大学　医学部　耳鼻咽喉科学教室、2）東京都立大学大学院　人文科学研究科　言語科学教室、
3）東海大学　医学部　耳鼻咽喉科頭頸部外科

O-02　吃音者に併発する社交不安症の有無におけるアプローチの検討

○北村　匠（きたむら　たくみ）[1)]、菊池　良和[2)]、仲野　里香[1)]、森田　紘生[1)]、立野　綾菜[1)]、
蔦本　伊緒里[1)]、加賀　勇輝[1)]、宮地　英彰[1)]

1）医療法人はかたみち　はかたみち耳鼻咽喉科、2）九州大学大学院　医学系学府　耳鼻咽喉科

O-03　中国と日本における吃音者の困難と合理的配慮に関するアンケート調査

○サイ　イキツ（さい　いきつ）[1)]、小林　宏明[2)]

1）金沢大学　人間社会環境研究科　地域創造学専攻、2）金沢大学　人間社会研究域学校教育系

口頭発表Ⅱ　9月3日（土）　13：20～14：20　第2会場

座長：塩見　将志（川崎医療福祉大学）

O-04　吃音を主訴に医療機関を受診する中学・高校生の特徴

○酒井　奈緒美（さかい　なおみ）[1)]、北條　具仁[2)]、角田　航平[2)]、石川　浩太郎[2)]

1）国立障害者リハビリテーションセンター研究所、2）国立障害者リハビリテーションセンター病院

O-05　当院の吃音臨床における治療効果と長期化しやすい症例の傾向

○清水　一真（しみず　かずま）[1)]、前新　直志[1)2)]

1）国際医療福祉大学クリニック　言語聴覚センター、
2）国際医療福祉大学クリニック　保険医療学部　言語聴覚学科

O-06　吃音のある幼児の構音能力と発話の関係

○越智　景子（おち　けいこ）[1)]、酒井　奈緒美[2)]、角田　航平[3)]

1）京都大学、2）国立障害者リハビリテーションセンター研究所、
3）国立障害者リハビリテーションセンター病院

O-07　ダウン症児における発話非流暢性の状態と自己発話認識について

○石上　志保（いしがみ　しほ）[1)3)4)]、前新　直志[2)]

1）東京逓信病院、2）国際医療福祉大学　言語聴覚学科、3）みくりキッズくりにっく、
4）世田谷こどもクリニック

口頭発表Ⅲ　9月4日（日）　12：00～12：40　第2会場

座長：中村　勝則（元保谷小学校 ことばの教室）

O-08　職員向けに吃音についてミニ研修を行ったことについて

○小島　さほり（こじま さほり）
千葉市西部児童相談所

O-09　管理された吃音者の身体
―文学作品から吃音について考察する意義

○橋本　雄太（はしもと ゆうた）[1)]、井上　裕太[2)]
1）立命館大学大学院 先端総合学術研究科、2）無所属（大阪府立大学 人間社会学研究科 博士前期課程修了）

O-10　リラクゼーション呼吸法

○篠原　シズ恵（しのはら しずえ）
栃木言友会 親子子育て相談塾ともよ塾

口頭発表Ⅳ　9月4日（日）　14：00～15：00　第2会場

座長：安　啓一（筑波技術大学）

O-11　言語訓練が、吃音のある小学生のコミュニケーションに関連する心理や行動に与える影響

○横井　秀明（よこい ひであき）[1)2)]、内田　椋子[1)]、伊藤　誓依也[1)]、羽佐田　竜二[1)3)]
1）特定非営利活動法人 つばさ吃音相談室、2）なるみ吃音相談室、3）医療法人赫和会 杉石病院

O-12　吃音のある児童生徒が学校生活で抱える困難に関する実態調査

○小林　宏明（こばやし ひろあき）[1)]、角田　航平[2)]、宮本　昌子[3)]
1）金沢大学人間社会研究域学校教育系、2）国立障害者リハビリテーションセンター病院、3）筑波大学人間系

O-13　自助グループへの参加が吃音のある人に与える影響；システマティック・レビューによる検討

○飯村　大智（いいむら だいち）[1)]、石田　修[2)]
1）川崎医療福祉大学 リハビリテーション学部 言語聴覚療法学科、2）茨城大学 教育学部

O-14　大阪公立大学耳鼻咽喉科における吃音に対する手帳取得の現状

○阪本　浩一（さかもと ひろかず）[1)]、藤本　依子[2)]、角南　貴司子[1)]、安井　美鈴[3)]
1）大阪公立大学 耳鼻咽喉科、2）大阪公立大学 リハビリテーション部、
3）大阪人間科学大学 保健医療学部 言語聴覚士科

ポスター発表　プログラム

ポスター発表　　ポスター会場

P-01　一般社団法人 東京都言語聴覚士会 言語聴覚の日イベント
「吃音 ～知って欲しいわたしたちの個性～」の開催報告

○本田 裕治（ほんだ ゆうじ）[1)3)]、小林 祐貴[1)3)]、波田野 健人[1)3)]、新発田 健太郎[2)3)]

1）東京ほくと医療生活協同組合 王子生協病院、2）国際医療福祉大学 塩谷病院、
3）一般社団法人 東京都言語聴覚士会

P-02　周囲に対して吃音の説明をした後、症状と悩みが緩和した吃音児の一例
―環境調整に焦点を当てた介入経過―

○黒澤 大樹（くろさわ だいき）[1)2)]

1）太田綜合病院附属太田西ノ内病院 総合リハビリテーションセンター 言語療法科、2）ふくしま吃音懇話会

P-03　吃音者における吃音症状生起時と非生起時の母音の音響的違い

○大湾 日菜美（おおわん ひなみ）[1)]、前新 直志[2)]

1）医療法人社団東光会 戸田中央リハビリテーション病院、2）国際医療福祉大学 言語聴覚学科

P-04　テレコミュニケーションを用いたリッカムプログラムと
対面式リッカムプログラムの効果の比較

○坂崎 弘幸（さかざき ひろゆき）[1)2)3)4)]、瀧元 美和[3)4)]、角田 玲子[1)2)]、伏木 宏彰[1)2)]

1）目白大学耳科学研究所クリニック、2）目白大学 保健医療学部 言語聴覚学科、3）田中美郷教育研究所、
4）リハビリテーションカウンセリングルームてんとうむし

P-05　成人吃音話者のコンパッション瞑想中における脳活動を捉える試み

○藤井 哲之進（ふじい てつのしん）[1)]、豊村 暁[2)]、川端 康弘[3)]、関 あゆみ[4)]、横澤 宏一[5)]

1）小樽商科大学 グローカル戦略推進センター、2）群馬大学大学院 保健学研究科、
3）北海道大学大学院 文学研究院、4）北海道大学大学院 教育学研究院、
5）北海道大学大学院 保健科学研究院

P-06　演題取り下げ

P-07　吃音者との接触経験と関わり方の関連性について：予備的検討

○遠藤 拓也（えんどう たくや）[1)]、前新 直志[2)]

1）社会医療法人社団 埼玉巨樹の会 新久喜総合病院、2）国際医療福祉大学 言語聴覚学科

P-08　注意の焦点化が手指の運動に及ぼす影響
―吃音者の注意の特性の解明に向けての予備的研究―

○村瀬 忍（むらせ しのぶ）

岐阜大学 教育学部

P-09　マインドフルネス瞑想の吃音話者に対する効果の予備的検討

○宮代 大輝（みやしろ だいき）[1)2)]、豊村 暁[1)]、灰谷 知純[3)]、三井 真一[1)]、熊野 宏昭[4)]

1）群馬大学大学院 保健学研究科、2）特定医療法人群馬会 群馬病院、
3）厚生労働省 国立障害者リハビリテーションセンター 研究所、4）早稲田大学 人間科学学術院

P-10　吃音をもつ看護大学生が基礎看護学実習においてヒューマンスキルに関する困難感を乗り越えた体験

○永峯 卓哉（ながみね たくや）、吉田 恵理子

長崎県立大学

P-11　非吃音者における話しにくさの自覚と心理特性の関係

○平山 瑠璃亜（ひらやま るりあ）[1)]、前新 直志[2)]

1）国際医療福祉大学病院 リハビリテーション室、2）国際医療福祉大学 言語聴覚学科

P-12　青年期吃音者が抱く悩みと親に求める支援

○吉田 恵理子（よしだ えりこ）[1)]、永峯 卓哉[1)]、菊池 良和[2)]、永峯 伊織[3)]

1）長崎県立大学 看護栄養学部 看護学科、2）九州大学病院 耳鼻咽喉科、3）長崎大学 医学部 医学科

P-13　吃音に対するVRを用いた曝露療法プログラムの開発と実践

○梅津 円（うめつ まどか）

株式会社 DomoLens

特 別 講 演

市民公開講座

SL

吃音の先にあった多様な世界

近藤 雄生（こんどう ゆうき）
ノンフィクションライター

この度は、第10回目となる日本吃音・流暢性障害学会において特別講演の機会をいただき、嬉しく、光栄に思っております。

私は現在、ライターとして取材して文章を書くことを生業としています。大学に入るまでは、文筆業とは一切縁のない人間だったのですが、紆余曲折を経る中で、フリーランスの立場で文章を書いて生きていきたいと思うようになりました。そして学生を終えたあとに5年を越える長い旅に出て、その過程でなんとかライターとして生きていけるようになり、現在に至ります。

そのような進路を選択することになった大きな要因の一つが、高校時代から深刻になっていた吃音の悩みでした。吃音がなければ、ライターにもなっていなかっただろうし、旅もしていなかったと思います。そしてそうした自分自身の吃音とのつながりや、同じくさまざまな苦悩を抱えてこられたであろう吃音当事者への思いを原動力に、『吃音　伝えられないもどかしさ』を執筆し、2019年に刊行しました。

本大会のテーマは「豊かな想像力と多様性を拡げる社会」です。自分自身、吃音、旅すること、文章を書くことを通じて、このテーマに関わることをさまざまな形で感じ考えてきたように思います。先の本の取材・執筆を進めるにあたっても、吃音の当事者や関係者からお話をうかがうたびに、他者に対して想像力を持つことや、多様性を受け入れる素地が社会にあることの大切さを痛感してきました。そうしたことを踏まえつつ、本講演では、吃音とともに生きるとはどういうことかについて、自分の経験をもとにお話ししたいと思っています。

自分の吃音は、旅の真っ只中にいた29歳のある日、ふと軽減していきました。そしてその後、吃音の症状は軽くなり続け、その悩み自体もいつしか自分の中から消えていきました。それが、前記の本の執筆を始めるきっかけでした。しかし本の刊行後に、再び自分の吃音が気になるようになりました。昔のように深く悩むことはないものの、吃音がやはりずっと自分の中にあり、いまもいろんな意味でその影響を受け続けていることを改めて感じています。

専門家の方、当事者の方、さまざまな形で吃音が身近な方、さらに、これまで吃音とは縁がなかった方など、いろいろな立場の方に聞いていただくことになるのかと思います。そうした場で、自分の個人的な思いをお話しすることは恐縮ではありますが、何かしら感じていただけることのある時間になればと思っています。

皆様にお会いできることを楽しみにしています。

略　歴

1976年東京都生まれ。ノンフィクションライター。
大谷大学／京都芸術大学／放送大学非常勤講師。大学院修了後の2003年、自身の吃音をきっかけの一つとして、妻とともに日本を発つ。オーストラリア、東南アジア、中国、ユーラシア大陸で、5年以上にわたって、旅・定住を繰り返しながらライターとして活動。2008年に帰国。以来、京都市を拠点に執筆する。著書に『吃音　伝えられないもどかしさ』『旅に出よう』『まだ見ぬあの地へ』など。

口 頭 発 表

O-01 吃音症における社交不安とコーピング特性の関係

○富里 周太（とみさと しゅうた）[1)]、矢田 康人[2)]、甲能 武幸[1)]、和佐野 浩一郎[3)]
1）慶應義塾大学 医学部 耳鼻咽喉科学教室
2）東京都立大学大学院 人文科学研究科 言語科学教室
3）東海大学 医学部 耳鼻咽喉科頭頸部外科

キーワード：社交不安障害、コーピング

思春期以降の吃音において社交不安障害との合併が問題となり、吃音を主訴に来院する成人の5-6割は社交不安障害を合併していると報告されている。しかし同じ「吃音」というストレス環境下におかれていても、社交不安障害を合併する症例としない症例とが存在するが、その差異についての報告は稀である。今回我々は吃音を主訴に来院した成人を対象に、コーピング特性という観点から、社交不安障害が併存する症例の特徴を検討した。

対象は吃音外来を受診した18歳以上の100症例（男性78、女性22、平均年齢28.4 ± 11.3歳）である。LSAS-Jのスコアが44点以上の症例を社交不安障害あり群とし、社交不安障害なし群とOASES（吃音の自覚的な重症度の質問紙）、BSCP（コーピング特性の質問紙）において比較検討を行った。年齢性別を説明変数に入れ、ロジスティック回帰分析を行った。

社交不安障害あり群はなし群に比較し、OASESの総合値が高く、BSCPの「回避と抑制」の値が高く、「視点の転換」の値が低かった。社交不安障害あり群は、自覚的な吃音の重症度が高く、回避と抑制を「する」傾向があり、視点の転換を「しない」傾向があると言えた。

Clark & Wellsのモデルにおいて、一般的に社交不安障害の発症には社会的な状況への曝露のみではなく、（失敗せずに話さなければならないといった）想定の活性化や安全行動などが複雑に関係していると考えられている。吃音における社交不安障害においても同様のモデルが提示されている。「回避と抑制」のコーピングをする傾向は回避的な安全行動を意味しており、「視点の転換」のコーピングをしない傾向は想定の活性化を意味しているだろう。こういった非適応的な認知、非適応的なコーピングが吃音症における社交不安を高める要因と考えられ、成人に対する認知行動療法や思春期の吃音への支援の一助となると考えられた。

O-02 吃音者に併発する社交不安症の有無におけるアプローチの検討

○北村 匠（きたむら たくみ）[1)]、菊池 良和[2)]、仲野 里香[1)]、森田 紘生[1)]、立野 綾菜[1)]、蔦本 伊緒里[1)]、加賀 勇輝[1)]、宮地 英彰[1)]
1）医療法人はかたみち はかたみち耳鼻咽喉科
2）九州大学大学院 医学系学府 耳鼻咽喉科

キーワード：吃音診療、社交不安症、LSAS-J

【はじめに】思春期以降の吃音者に社交不安症（SAD）が併発することが多く、幼児期・小学校低学年とはアプローチが異なる。しかし、社交不安症を併発する場合、どうアプローチを変えるべきか、一致した見解は得られていない。当院では独自の吃音の悩みに関する問診項目を聴取しており、社交不安症の有無に関係あるのか確かめることを目的とした。

【方法】2018年から2022年まで吃音を主訴に当院を受診した101名（男性79名、女性22名）を対象とした。平均年齢は21.9歳（10歳から48歳）。社交不安尺度LSAS-Jの点数により、SAD群44名、非SAD群57名と分けた。独自の吃音の悩みの問診として、話す前として「相手にどもることを知られたくない（以下、吃音を隠したい）」「話す直前に、うまく言えるか、つっかえる（どもる）か、不安になる（以下、予期不安）」の2項目。話している最中は「自分の吃音をコントロールできない」「言いにくいことばがあると、言いやすいことばに置き換える（以下、言い換え）」の2項目。話し終わった後は「ことばのつっかえた後、落ち込んだり、自分を責める（以下、失敗の反芻）」の1項目を選んだ。各問診項目の該当割合と、それらおよび「性別」において社交不安症の有無で差を認めるか検討した。

【結果】「吃音を隠したい」は75%、「予期不安」は96%、「自分の吃音をコントロールできない」は88%、「言い換え」は89%、「失敗の反芻」は77%だった。SAD群で有意に多かった割合は、「吃音を隠したい」と「女性」だった。その他の項目では有意差を得なかった。

【考察】社交不安症を併発する吃音者の場合は、「吃音を隠したい」気持ちを強く持っていることが分かり、カミングアウトして合理的配慮を得るアプローチを選択肢に入れておくべきではないかと考えられた。また、女性は社交不安症のリスク要因となりうるために、診察時に吃音が顕在化していなくても、社交不安症の併発に注意すべきではないかと思われた。

ポスター発表

P-01 一般社団法人 東京都言語聴覚士会 言語聴覚の日イベント「吃音 ～知って欲しいわたしたちの個性～」の開催報告

○本田 裕治(ほんだ ゆうじ)[1)3)]、小林 祐貴[1)3)]、波田野 健人[1)3)]、新発田 健太郎[2)3)]
1）東京ほくと医療生活協同組合 王子生協病院
2）国際医療福祉大学 塩谷病院
3）一般社団法人 東京都言語聴覚士会

キーワード：吃音啓発、吃音者支援、社会的認知

一般社団法人 東京都言語聴覚士会の活動の一つに「言語聴覚の日イベント」がある。イベントでは、言語聴覚士の業務に関するテーマを取り上げ毎年開催している。吃音は、近年ドラマや映画、ドキュメンタリー番組、書籍などで紹介されることが増えているため、以前と比較すると社会的な認知度は上がってきていると言える。しかし、まだまだ十分ではなく、様々な場面で吃音のある人が苦労する場面、状況が多々あることも事実である。

今年度の東京都言語聴覚士会における言語聴覚の日イベントでは、「吃音の啓発」に焦点を当て、一般の方向けにイベントを開催する。場所は東京都墨田区錦糸町マルイのイベントスペース（ミライロハウス）の一角を借り、言語聴覚士の業務内容の紹介、吃音の概要、ライフステージ毎の困難さを感じる場面とその対策等を掲示、配布する。2022年7月～約1か月間、情報を掲示する。同月24日（日）に現地にてイベントを開催し、一般の方向けにイベントの概要・言語聴覚士の業務内容・吃音の説明、吃音当事者による体験談の紹介を実施する。新型コロナウイルス感染症の拡大防止に配慮し、当日のイベントはオンラインでの開催を予定している。

「吃音」がより社会に認知されることで、吃音のある人の生きやすさにつながることを目指し、啓発活動を継続するとともにイベントの詳細を報告する。

P-02 周囲に対して吃音の説明をした後、症状と悩みが緩和した吃音児の一例 ―環境調整に焦点を当てた介入経過―

○黒澤 大樹(くろさわ だいき)[1)2)]
1）太田綜合病院附属太田西ノ内病院 総合リハビリテーションセンター 言語療法科
2）ふくしま吃音懇話会

キーワード：吃音の説明、環境調整、カミングアウト

【はじめに】吃音児は吃音への指摘、からかい等で症状や悩みを悪化させやすい。この場合、吃音児の周囲に吃音の説明をし、緊張性のないくり返し等、自然で楽な症状で話せる環境を作ることで症状や悩みの緩和が期待できる。今回、症状や悩みが悪化した吃音児に対して園や学校の環境調整を中心に介入したため、経過を報告する。

【症例】小2男児。初診時（X年Y月）6歳5ヶ月（年長）。発吃は3歳。吃音検査法の中核症状頻度は27.5で中等度。症状は1～3秒のブロック、緊張性がある1～3秒の引き伸ばしとくり返しがあり、二次的症状も認めた。園で吃音のからかいを受けており、話しづらさもあった。

【経過】まず園で吃音の説明を行う方針となった。本児に対しては自然と生じる楽なくり返しなどの症状の時は、発話の工夫をせずにそのまま話した方が良いこと、周りから吃音の指摘等を受けて症状を隠すような工夫をすると悪化しやすいこと、楽なくり返しで話すために園で説明をすることを理解してもらった。園での説明内容は上記に加えて、本児と話す際の対応などを入れた。Y+2月に園で吃音の説明を実施後、二次的症状は消失し「吃音が怖くなくなった」との発言が聞かれた。就学後のY+7月にもクラスで吃音の説明を実施。その後ブロック症状が減少し、緊張性の低い2～3回のくり返しが中心となった。この間、随意吃を用いた指導を適宜併用した。現在（X+1年Y+4月）、主な症状は緊張性のない1～3回のくり返しとなった。コミュニケーション態度テストは9/33点で、学校での困り感は聞かれなくなった。

【考察】本児の経過から園や学校の環境調整が、症状と悩みの緩和に影響した可能性が考えられる。また今回のような環境調整をする場合、楽な症状を伴って話せるよう目指すこと、そのための環境調整であることを対象児が十分に理解し、実際に対象児が楽な症状を伴って話そうと思えることで、症状や悩みの緩和につながると推察する。

日本吃音・流暢性障害学会 第10回大会
プログラム・抄録集

大会長：前新 直志

事務局：国際医療福祉大学言語聴覚学科
事務局長　畦上恭彦
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸2600-1
E-mail：jssfdmeeting10@gmail.com

出　版：株式会社セカンド
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793　FAX：096-386-2025
https://secand.jp/

日本吃音・流暢性障害学会第10回大会事務局

国際医療福祉大学言語聴覚学科
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸2600-1
E-mail : jssfdmeeting10@gmail.com